

黒井弘騎

表紙イラスト 白うづい

二次元ポチ文庫

2D PETIT POCKET NOVELS

聖天使ユミエル外伝
エピソード
ゼロ

試し読み版



当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『聖天使ユミエル外伝 エピソードゼロ』
に基づいて作成しております。

※本作は二次元ドリームノベルズ『新装版 聖天使ユミエル シャドークルセイド』『新装版 聖天使ユミエルⅡ ダスクリベレーション』『聖天使ユミエルⅢ～Ⅳ』（キルタイムコミュニケーション・刊）とともにお読みいただけます、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



聖天使ユミエル外伝
エピソード
ゼロ

黒井弘騎
表紙イラスト/白う〜凧い

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

はむらゆみ

羽連悠美

可憐な容姿と純情無垢な心をあわせもつ少女。

光翼天使ユミエルに変身し、異形の怪人エクリプスを狩る使命を負っている。

スパイダーエクリプス

学園に潜む蜘蛛型のエクリプス。

すべてが静寂に包まれた闇、誰一人知らぬ夜の狭間。人の目に映らぬ世界で、激しく戦う二つの影があつた。

「はああああ——っ！」

戦いを優勢に進めているのは、金髪の美少女だつた。白いケープとミニスカートを翻して戦う凜姿は、まるで夢のように幻想的ですからある。だが、その相手はさらに現実感を欠く存在だつた。

「ギキイツ、やるな小娘……キイイツィーッ！」

獣じみた金切り声をあげ、闇の中を跳梁する黒い影。白衣の少女と戦っているのは、人とコウモリの混ざりあつたような怪人だつた。そのおぞましき異形は、悪夢の産物としか思えない。

漆黒の翼が宙を舞い、鋭い爪牙が少女を狙う。だが白衣の戦士は、その悉くを回避し反撃を積み重ねていく。

人知を超えた怪物と直角以上の戦いを続ける少女も、やはり普通の人間ではなかつた。その小さな背中からは、神々しく輝く二枚の翼が生えているのだ。

魔人と戦う金髪の美少女は——天使、だつた。

光の翼が眩く輝き、天使の姿を浮かび上がらせる。その清艶な美しさは、暗黒の中においても一際輝いていた。

均整のとれた肉体は瑞々しい若さに溢れ、抜群のスタイルを誇っている。きゅつとくびれた腰やすらりと伸びた四肢など、全体的にスレンダーで優美なボディライン。だが釣鐘型に整ったCカップの美乳やむっちりした太ももなどは、媚肉の魅力を十分すぎるほど匂わせている。

そんな魅惑の美身を包んでいるのは、神聖麗美であると同時にどこかアニメのヒロイン然とした印象を与えるコスチュームだった。

少女の肢体には黒いボディスーツがびっちり張り付き、極上のボディラインを艶かく強調している。薄手のアンダースーツの上からは、清楚な純白の衣装が天使を包んでいた。白いケープが細肩を覆い、太ももを殆ど晒すほどのミニスカートが腰下でひらめく。両手を覆うロンググラブと膝上までのニーソックスはエナメル質に輝き、麗美な姿をいっそう魅力的に飾り立てていた。

少女の姿は天使と呼ぶに相応しい神々しさと同時に、フェティッシュなエロティシズムをも内包したものだった。

「欲望のために人の幸福を喰い散らす絶望の影……わたしは、絶対に許さない！」

透き通った美声で怪物に言い放つ聖天使。可憐な顔立ちはあどけなさを残しながらも、凛と整った端正なものだった。優しげな双眸には、純粹さゆえの強い正義感が輝いている。命を賭した戦いの只中にあつても、凜然たる表情には僅かの恐れも映ってはいない。

「……影を滅ぼす奇跡の剣っ！」

気合とともに、手にしたロザリオから光の刃が伸びた。ぶわり、と大きく翼を開き、全力で光剣を振り切る少女天使。プラチナブロンドの長髪が空を舞い、聖なる光輝が闇を裂く。光の羽根が吹雪のように舞い散り、必殺の剣撃が魔神の胴をなぎ払う。美しき剣舞は、天使が下す断罪の裁きだった。

「とどめよ、エクリプス！」

「ぐげ、ぎゃあああああ——！」

ズバッシャアアア！ 肉を裂く斬撃音とともに断末魔の叫びが響く。聖剣の一閃で、エクリプスと呼ばれた怪物は両断されていた。噴き上がった返り血が天使のコスチュームを濡らし、聖なる純白を赤く汚す。

「やっと……終わったわ」

戦いが終わり、光の刃が消滅する。闇の中、ただ一人戦場跡に佇む血濡れの聖戦士。その姿は近寄りがたい荘厳さとともに、どこか哀しげな陰を負っていた。

「ぎひひ、エクリプスを狩る者……光翼天使ユミエルう！ 終わっただと……バカがあ！」
上半身だけになったエクリプスの声が、突如闇に響いた。ごぼごぼと血を吐きながらも、少女天使に死に際の呪詛を投げかける。

「人の欲望は決してついえぬ……すなわち貴様の戦いは終わらんだ。せいぜい地獄から

楽しんでしてもらおうぞユミエル。報われぬ戦いを続ける貴様が欲望の影に敗れ、絶望と恥辱に沈んでいくその姿をな……くきいいぐぼあ！」

哄笑とともに怪物は絶命し、影のように消えていった。

「う……く。う、うう……」

今際の際の足掻きは、しかし効果を存分に果たしていた。勝利したにもかかわらず、少女はいまにも泣き出しそうな、あまりに哀切な表情で嗚咽を零す。

「わ、わかつてるわ。そんなこと、言われなくてもわかつてる……！」

天使の少女——光翼天使ユミエルは、いまだ木霊する残る言葉から逃げるように小さく首を振った。凜々しい戦士の顔には、少女本来の繊細な感情が浮かんでいる。救いなき未来を浮き彫りにする怪物の言葉に、ユミエルの心は深く傷つけられていた。優しげな瞳には、隠し切れない涙が浮かんでいる。

「みんなの幸せを守るため、エクリプスと戦い続ける。それがわたしの宿命……ママから受け継いだ、光翼天使の使命。そ、そんなこと、わかつてるもん……」

力なく呟き、己の使命を再び胸に刻むユミエル。

人々を守るため、人知れずエクリプスを狩り続ける——たとえどれだけ傷つこうとも、誰にも理解されなくとも、たった一人で。これは。最愛の母を失ったときから背負った逃れられぬ宿業なのだ。

だが、それは繊細な少女にとってあまりにも残酷な使命だった。自分のすべてを犠牲にして、血と絶望にまみれた戦いを続ける日々。一人の女の子として夢と希望に溢れた青春を送ることなど叶わない。

母の使命を継ぐ聖天使としての誇りも自負もある。それでも、光翼天使の宿命は■い少女が背負うにはあまりに重く、そして辛すぎた。

(ママ、わたし頑張ってるよ……けど辛いよ、苦しいよ……。ねえ、この苦しみはいつ終わるの？ ねえママ、ママあ……)

小さく震えながら、ぎゅつと十字架を握り締めるユミエル。亡き母の形見は何も語ってはくれなかった。

※

「ふう、終わった終わった！ やつと遊べるよ！」

中間試験最終日。放課後の教室は賑やかな喧騒に包まれていた。久方ぶりの解放感に浮かれた学生たちは、友人同士誘い合って早速遊びの相談をしている。

「ねえねえ、みんなで駅前にも遊びに行かない？」

「いいね。じゃ、もう少し人数集めるか……お!!」

男女混合のグループは、どうやら街に繰り出すことに決めたようだ。参加する男女の数を合わせようと、一人の男子は他の学生を探す。

少女の声をまるで無視し、荒々しい乳責めは延々と続く。六本の腕を巧みに使つての時搾乳はあまりに苛烈で、そして甘美だった。一つの掌で乳峰を掴まれ、同時にもう一つの掌が五指を埋めてくる。かと思えば蜘蛛の爪のように鋭い指先で先つちよをカリカリと刺激され、震えたおっぱいを無数の指でむぎゅう、と搾られた。荒々しくも女の急所を的確に可愛がつてくる乳嬲りに、苦痛混じりの甘い乳悦が駆け巡つてしまう。

——いやあつ……おっぱい、はげしい……つ！

人間では絶対に不可能な異形のテクニクに、少女の官能はなすすべもなく翻弄されていた。いままで何匹ものエクリプスに犯され開発された少女天使の肉体は、恨めしいほどに敏感なのだ。乳肌はじつとりと熱を持ち始め、黒いスーツには汗が滲み出してきている。小ぶりの乳首ははやくも勃起しかけ、薄手の生地をいやらしく押し上げてしまっていた。「おいおい、なに乳首勃たせてんだよ。お前感じてるのか？ ひひ、淫乱な正義の味方もいたもんだぜ！」

「な……そ、そんなことない！ わたし、感じてなんていないもん……っ！」

影魔の鋭い追及に、少女はハッと我に返つた。悲痛な声でうめき、イヤイヤと首を振る聖少女。気丈だった表情が、恥辱でぼうつと赤らんだ。

影魔との戦いによる負の遺産——早熟な肉体は、怪物の責めにさえ被虐の悦びを見出し、てしまうのだ。恥知らずな本性を指摘され、清純な少女の心は軋みをあげていた。

「は、バカ言ってんじゃねえよ。じゃあなんでここはこんなにコリコリになってんだ、ああ？ 淫乱なお前が、気持ちいいって感じてるからだろうがあ！」

羞恥に悶える変身ヒロインを、怪人はねちねちと執拗に追い詰める。鋭く尖った指先が、スーツを押し上げてしまっている勃起乳頭をキュキュツと掴み込む。

「ひ!? そ、そこ……くはっ、ひいいいい！」

充血しきった肉豆をきつく虐められ、痛みとともに鋭い快美感が迸る。鋭敏な性感帯をピンポイントで可愛がられ、ユミエルは頤を反らしよがり悶えた。

「可愛い声で泣きやがる。こいつあ虐めがいがあるな。ぐへへへへ、こいつが感じるのかよ……おらおら！」

「うあ、そ、そこいじつちやダメ……っんいいい！」

キュツ、コリコリコリ！ 六本腕での同時搾乳はそのままに、蜘蛛怪人は左右の乳首を重点的に撈り抜いてきた。勃起豆を揉み潰さんばかりの勢いで掴み転がされ、稲妻のような乳悦がおっぱいを駆け抜ける。

——うあ、ち、ちくびい……！ だめ、おっぱい、壊れちゃうよお！

コリコリに硬度を増した性感帯を虐められながら乳肉を荒々しく揉み込まれ、おっぱい全体が痺れるように気持ちよくなってしまう。蜘蛛糸拘束の太ももはピクピクと痙攣し、糸が肉に食い込む虐待が被虐のエッセンスとなつて少女をさらに追い詰めた。

「痛っ……：ひう、お、おっばい激しくしないで……：はひいん！　くあ、い、いいい……：！」
 童顔に汗を散らし、悩ましい声で身悶えるユミエル。潤んだ瞳にはいまだ抵抗の意思が残っているが、漏れ出す声には女としての悦びが隠せていない。淫らに開発されている変身ヒロインは、異形のテクニックによつてマゾヒスティックな本性を暴かれつつあった。肉悦に翻弄される聖天使に、エクリプスはさらなる責めを追加した。二対の腕で乳峰をしつこく可愛がりながら、残りの両腕が少女の身体を這い下がっていく。汗の染みたボディスーツを撫でるように滑り、可愛らしく窪んだお臍を意地悪くくすぐりながら、さらにその下——白いミニスカートへと魔手が伸びる。

「あ、あふああ……：!! や、そ、そこは……：！」

影魔の次なる狙いを察知し、聖天使は怯えた声をあげてしまった。エクリプスの魔手が狙っているのは、聖衣の下に隠された一番の弱点なのだ。

——だ、だめ……：そんなのだめよ。いま、そこを責められちゃったら……：！」

複数の腕でおっぱいを可愛がられているだけでも気持ちよくてたまらないのだ。その上一番敏感なあそこまで煽られたら、一体どうなってしまうのか——淫辱の予感に、光の翼がふるふると震えた。

「ひひ、怯えてるのか？　それとも期待してるのかな淫乱天使さま？」

「やっ。そ、そんなことない……：ん、んううっ！」

いやらしい言葉責めに顔を赤らめながら、天使はなんとか抵抗を続けた。だが両手を大きく開かれた束縛姿勢では、反撃することなど敵わない。さらには激しい乳責めの悦楽で、思うように力が入れられなかった。それでもなんとか内股気味に太ももを摺り寄せるユミエルだったが、それも自身を追い詰めるだけだ。汗の浮いた太ももには、極細ワイヤーが幾重にも巻きついていいるのだから。

「痛う……くき、つううう！」

柔らかな肉肌にワイヤーが食い込み、むっちりしたも肉がボンレスハムのように撓んだ。痛みを堪え気丈にも抵抗を続けるユミエルだったが、そんなものでエクリップスの力に逆らえるはずがない。白いニーソックスに指を食い込ませながら、怪人の掌が少女の美脚をわし掴む。そのままぐい、と左右に力をかけられ、天使の股間はあっけなく開かれてしまった。「ひっ」と声をあげる間もなく伸びたもう一本の腕が、揺れるミニスカートをペろりと剥きあげる。曝け出された少女の股間に、蜘蛛の視線が遠慮なく注がれた。

「へへへ、感じてないんじゃないのかよ。お前、ぐちよぐちよに股濡らしてんじゃないやねえかよ！」

「い、いやあ。そんな、言わないでえ……！」

容赦ない視線と嘲罵に、ユミエルは童顔を赤らめ身悶えた。イヤイヤと首を振り否定するも、彼女自身わかっている——恥知らずな自分の秘所は、淫辱の責めに屈服してあさま

しすぎる嬌態を晒しているのだと。

少女の純心をそのまま形にしたような純白のショーツは、しとどに濡れそぼった恥ずかしすぎる嬌態を晒していた。濡れた薄布は股座にびっちり吸いつき、小ぶりの恥丘の陰影を浮かび上がらせている。開きかけてピクピクと蠢くクレヴァス、そしてシルク生地に染み続ける愛蜜の滴り。乱れきったそのさまは、清純な天使の持ち物とは思えぬほどに卑猥だった。

——や、やだ……あ。わたし、イヤなのに、恥ずかしいのに……。どうして、こんなに……！

鋭敏な肉体はエクリプスの妖異な責めにさえ反応し、あさましい反応を示してしまう。いまもコリコリと乳首を颯られおっぱいを揉み潰されるたび、新たな恥蜜が溢れてきて止まらなかった。あまりに淫らな自分の身体に、ユミエルは唇を噛んで羞恥する。

「口じゃどう言っても身体は正直だな、淫乱天使さま？ 悦べよ、おっぱい揉みながらこっちも弄ってやるからな、ぐひひひ！」

「く、ひ!? そ、そこはやめ……つくうん！」

影魔は身体を屈めて、蜘蛛の頭を股間に押し付けた。熱い息がショーツ越しに秘所をくすぐり、妖しい焦燥感が牝芯を蕩かせる。エクリプスはそのまますりすり顔と顔を動かし、少女の股間を擦り責めてきた。蜘蛛の顎を開いてパンティ越しに秘部を甘噛みし、人間と

同じ形状の舌を伸ばして染み出す恥蜜を舐め味わう。

「や！　そ、そんな……そこ、恥ずかし……」

「くく、淫乱な味がして美味いぜ。どんどん溢れてきやがるな。もつと飲んでやろうか……くひひひ！」

「そ、そんなあ。そんなの飲んじやだめ……つうはあ、つはひいひい！」

恥辱に悶えるユミエルだったが、秘淫しゃぶりの悦感は強烈だった。浮き出したクレヴァスを舌先でしゅしゅつと擦られ、鋭い悦びが粘膜にまで伝わってくる。不気味な蜘蛛の顎を股肉に食い込まされると、怪物に食されているという惨めさに被虐的な悦びさえ覚えてしまった。しかも顎を動かされると濡れたパンティが肉園と擦れあい、シルクの裏地が秘肉を優しく刺激してくるのだ。両胸を揉まれながらももつとも敏感な箇所を可愛がられ、被虐の愉悦が子宮までもを疼かせる。押し開かれた太ももをピクピクと痙攣させ、ユミエルは悩ましくよがり悶えた。

「おいおい、すげえよがりようだな。いまからそんなんじやあ、コイツをくらつたら狂っちまうかもなあ！」

「え、えひいひい!?　な、なにを……ひつきいひい!?」

甘く喘いでいたユミエルだったが、突如股間に走った激感に悲鳴をあげた。股間を舐めていた大蜘蛛が、なんと少女の恥丘に鋭い牙を立ててきたのだ。

「くはッ、いひいイイイ！ ひあ、痛う……くひ、ひいひい——！」

ずぶ、ぶすう！ 長く伸びた二本の毒牙が、白パンティを食い破って牝肉に突きたてられる。いままでの甘噛みとは別次元の激感に、ユミエルは背中を仰げ反らせ絶叫した。蜘蛛の牙は長いが針のように細く、少女の肉を裂くほどの質量はない。だが、敏感な恥所への針責めはあまりに強烈すぎた。鋭痛と虐悦が混じりあつた激感が、少女の下半身を焼き尽くしていく。

「かつ、はぎいいい！ はう、あう！ あつはあああああ——！」

蜘蛛男が顎を動かすたび、熾烈な痛悦が股間を連続的に襲う。浅く歯を立てられながら股間を噛みしやぶられ、ユミエルは翼をばたつかせて悶え狂った。淫乱な牝花は痛み混じりの快楽にマゾヒスティックな肉悦を覚え、濃厚な本気汁をだばだばと垂れ流している。シルクのショーツは針で裂け、痙攣する幼花が破れ目から覗いていた。

「へへ、いやらしく乱れやがって……オレに食われるのがそんなに気持ちいいかよ淫乱マゾガ！ だけどよお、コイツの効き目はこれからなんだぜ？」

「え、ひいひい？ そ、それって……あ、ああア！」

ずぶつ！ 細い毒針が実際深く突きたてられた。熾烈な虐悦に牝芯を焼き尽くされ、言葉さえ出せずに悶絶するユミエル。秘粘膜を覗かせてひくつくクレヴァスを一舐めすると、影魔は再び首を上げた。秘所舐めから解放された瞬間、異様な感覚が少女の身体を襲う。

——あ……な、なにこれっ!! からだがあつい……も、燃えちゃいそお……!!

もう触れられてもいけないのに、先ほど針を刺されていたときよりも股間が疼くのだ。白い牝肌は紅潮し、じつとりと汗が噴出して止まらない。束縛されている両手の先では、細い指先が辛そうに蠢いていた。

「か、はあ……はあ!? あ、あなた……なにを……つくふうん! こんな、おかしい……い!」

はあはあと息を荒げ、身を焼く淫悦に翻弄されるユミエル。熱く疼いているのは針を刺された秘所だけではなかった。依然揉み廻られているおっぱいはさらに感度を増し、勃起乳首がスーツと擦れるだけでも気持ちいい。吐息と一緒に漏れ出す声音は、困惑とともに甘えるような媚びを含んでいた。瞳を潤ませ唇を震わせる表情には、焦慮以上に耽溺の色が強い。

「どうよ、オレの特製の毒の味はよお。ひひ、身体が疼いてたまらねえだろうが!」

「え……そ、それってえ……はあ、んっ!」

激しく上下する乳房を搾り潰し、痙攣する太ももに指を這わせながら、スパイダーエクリプスはさも楽しげに語ってみせた。一秒ごとに激しさを増す肉悦に打ちのめされ、ユミエルは金髪を振り乱しよがり喘ぐ。

人をやめたエクリプスは、己の欲望を満たすため様々な能力を身につける。スパイダー

エクリプスの毒液には、女体を狂わせる媚薬効果が含まれていたのだ。

「こ、こんなことって……うああ、はみううう！」

影魔の媚毒の効果は靦面だった。ただでさえ耐え難かった被虐の魔悦が、何十倍もの快感となって少女を翻弄する。まるで全身が性感帯になってしまったかのようだ。

——うああ……すご、すごい！ からだが熱くて……イヤなのに、気持ちよくなっちゃう……！

揉まれているおっぱいだけでなく、全身が燃えるように疼いてくる。蜘蛛糸に縛られた肢体をくねくねと揺すり、ユミエルは暴走する官能に耽溺した。凜々しかった瞳は涙で潤み、半開きの唇からはあはあ甘い息が止まらない。

「悦んで貰えてるみたいだな。毒も回ったところで……もっと激しく犯してやるぜ、ぐははは！」

「や、やああ……そんな、らめえつ。わたひ、もう敏感すぎちゃってえ……ひあ、うはああああ！」

悩ましい哀願の声など、聞き遂げられるはずもない。怖いぐらいに感度を増した女体を、陵辱者はいまままで以上の苛烈さで嬲り抜いてきた。二十本の指で敏感乳を隅々までこねくり回され、蜘蛛の爪で乳首をコリコリと虐められる。媚毒陵辱のあまりの快感に、ユミエルは光翼を震わせあさましくやり狂った。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>